

オルフ：カルミナ・ブラーナ

「カルミナ・ブラーナ」とは、ラテン語で「ボイレンの詩集」という意味である。19世紀初頭、ドイツ、ミュンヘン近郊のボイレン修道院で発見された中世の写本に収められていた詩集をこう呼ぶが、カール・オルフ（1895-1982）がこの詩集をもとに作曲したことから、そのまま曲のタイトルにもなった。

詩は中世ラテン語や古フランス語、中高ドイツ語など、現代語ではない言葉で書かれており、詩の作者たちは13世紀初頭の若い修道僧や学生であった。彼らの詩は中世の禁欲的なイメージとは逆に自由でおおらかであり、時代の風刺、恋愛、酒、ときには賭け事まで、世俗的な題材によるものがほとんどだった。やがてこの詩集は出版され、オルフの目に触れることになる。オルフはこの詩集から24の詩を選び、3群の合唱とオーケストラによる《カルミナ・ブラーナ》を作曲した。

オルフはなぜ、中世という途方もない昔の詩を作品に用いたのだろうか。その大きな理由は、オルフが古い時代そのものに深い関心をもっていただことにあった。《カルミナ・ブラーナ》を作曲する以前から、モンテヴェルディの歌劇をはじめ、ルネサンスやバロックの音楽の研究や上演に力を入れていたのである。過去の遺産を現代にふさわしいかたちで蘇らせることは、オルフの重要な活動のひとつだった。中世の詩への作曲も、その延長線上にあったと考えられる。

オルフはこの詩集との出会いについて、「1934年の聖木曜日にこの詩集を手に入れた。私にとって記念すべき日だった。本を開くと最初のページに、昔から知られた『フォルトゥーナと運命の車輪〔註：フォルトゥーナは運命の女神〕』の絵画があり、その下に詩があった。… 絵と言葉が私の心を捕えた。」と熱く語っている。その晩は一睡もせず詩を読みふけり、第1曲のスケッチをもう書き始めたという。

オルフの心に浮かんだのは、歌って踊る合唱による舞台作品だった。今日では演奏会形式で演奏されることが多いが、もともとは踊りを伴う舞台を想定したものだ。この発想は、オルフが1924年にドロテア・ギンターとともに設立した体操、音楽、舞踊のための「ギンター・シューレ（学校）」を思い起こさせる。たとえ舞踏がなくとも、この曲を支配する原始的なリズムの拍動には、人間の本能を駆り立てる魔力が感じられる。さらに、合唱や独唱、つまり人間の「声」が燃え立つような生命力を発散する。また、簡素なリズムやメロディの繰り返しは、1930年代からオルフが取り組んできた児童のための音楽教育とも結びつく。

編成は、大合唱、小合唱、児童合唱の3種の合唱、ソプラノ、バリトン、テノールの独唱、3管編成のオーケストラからなり、オーケストラには、ティンパニ5台、チェレスタ、5人の奏者による打楽器群、2台のピアノなども含まれる。

曲は、人間が運命の女神フォルトゥーナの回す車輪に操られているにすぎないことを歌う「運命の女神フォルトゥーナ、世界の女帝よ」で始まる。曲の中でもっとも有名な部分であり、打楽器が刻む切迫したリズムと短調の簡素なメロディの繰り返しが、はげしい緊張感を生む。この詩は全曲の最後でも歌われるため、まるで、すべての詩で歌われたことが、この運命の掟のなかにあるかのようである。

第1部「はじめての春」は、小合唱による聖歌のような「春の幸せな顔に」、バリトン独唱による「太陽はすべてを穏やかにする」、大合唱による「見よ、心地よく」に続いて、後半「草原にて」では舞曲や民謡風の歌が交代していく。

第2部「酒場にて」は、男声のみで歌われる。バリトン独唱が快楽や悪徳を賛美する若者や飲んべえの大修道院長を演じたり、テノール独唱が皿の上に横たわる白鳥の哀れを歌ったりし、合唱による陽気な酒の歌で終わる。

第3部「愛の宮廷」は、児童合唱とソプラノ独唱の対話や、バリトン独唱、ソプラノ独唱、合唱が男女の愛の喜びを歌い上げ、徐々にクライマックスを築く。歓喜の大合唱は、一転して運命の女神フォルトゥーナの歌へとつながり、曲は幕を閉じる。

遠山菜穂美